かしこ暮らしっく
長岡京

約 1200 年前、この乙訓の地に日本史上類を見ない僧侶がいた。その名は「空海」である。彼がいた頃の寺は失われてしまったが、形を変え、時を超え、今なおここに存在する。我々は今、サステナブルな社会について考えなければいけない時代にいる。それを考える時、文化財は大いなるヒントを与えてくれる。文化財はそれ自体が重要なだけではない。この地に眠る歴史の積み重ね、それを守ってきた職人の技術、これらが世界中で唯一無二の存在だから重要なのである。これからの私たちは、歴史に敬意を払い、新しい未来のために考え続けていかなければならない。

Moshi-Mosu Ⅳ

もっと知れば、
もっと好きになる！
長岡京市の歴史・文化財

Vol.20
2022
summer

One and only

無二亦無三

■ Take Free ■

つなげ、未来へ！

One and only

乙訓寺　木造十一面観音立像

おとくにでら　もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうぞう

乙訓寺は推古天皇の勅命により創建され、長岡京の都が開かれると、高い寺格を得て大寺院となったと伝わります。弘仁２年（811）には空海が別当に任じられ、翌年にはここで最澄とも会うなど歴史の舞台に登場する重要な寺院です。
現在、本尊の向かって右側に安置されている十一面観音立像は、元禄８年（1695）、隆光による乙訓寺再興時に秋篠寺（奈良市）から移されたものです。本体背面や台座の記述や部材の痕跡から、移転時に解体修理されたと推測されています。また本像は長谷寺式十一面観音の特徴を有し、鎌倉時代末期に制作された優品として高く評価され、市指定・府暫定登録文化財となっています。しかし、経年劣化により像の各つぎ目に緩みが生じ、像の立ちがきわめて不安定な状態となっていたことから、令和２年度より２か年計画で部分解体修理に着手しました。解体修理を進めていくと、像内に多量の文書が納入されていることが判明し、その文書を開くと、いずれも造立当初の文永５年（1268）の文書の可能性が高いことがわかってきました。像本体もクリーニングによって当初の金箔や彩色の一部が現れ、本来のすがたが見事に蘇っています。

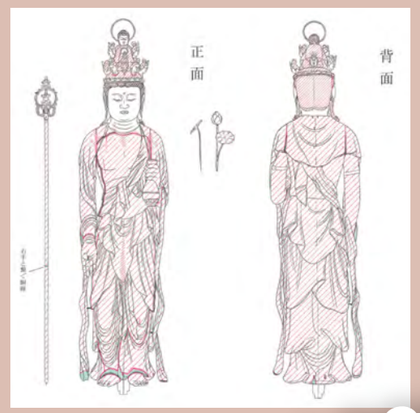
修理後のすがた

像高：175.0cm
重量：27.2 kg（像のみ）
構造：寄木造
材質：桧材

1 像のデザイン

十一面観音の頭の化仏や光背には一つひとつ仏教世界の意味がある。

頭の化仏（けぶつ）



修理図面（赤色斜線部を修理）

2 本当のすがた

解体修理では接合されていた各部材を分解。経年劣化による材の歪みや部材が欠損した箇所も多く、新たに桧材を用いて補填修理。ばらばらになって無理やり接着されていた錫杖（しゃくじょう）も見事に復元された。天冠の宝飾具は後補であるため、取り外し、造立当初の姿に復した。

解体された部材

3 像内に残る記録

「文永五年七月十八日」

「一日観音奉加銭事」

納入品は文書類だけであったが、その量は 200 点以上におよぶ。文書には奈良の興福寺子院「龍花院」の結縁交名、文永５年７月 17 日と 18 日の日付を記すものがある。また、「一日観音奉加銭事」「一日観音御勧進銭」という文言もみられ、“一日造立仏”として造立された像と考えられる。一日造立仏は雨乞いや疫病退散を願い、仏師が一日で彫り上げる仏像で、史料で裏付けられたものは国内３例目の発見。最も古い事例となった。

4 仏師の軌跡

造立当初は前面→中間→背面の順に「かすがい」[※1]で各材が繋がれ、納入品は後ろから収納されていた。元禄８年の解体修理時は、背面→中間→前面の順で「膠[※2]（にかわ）」で繋がれ、納入品は前から。部材に残る様々な痕跡は、制作工程や当時の技術を探る手掛かりとなる。

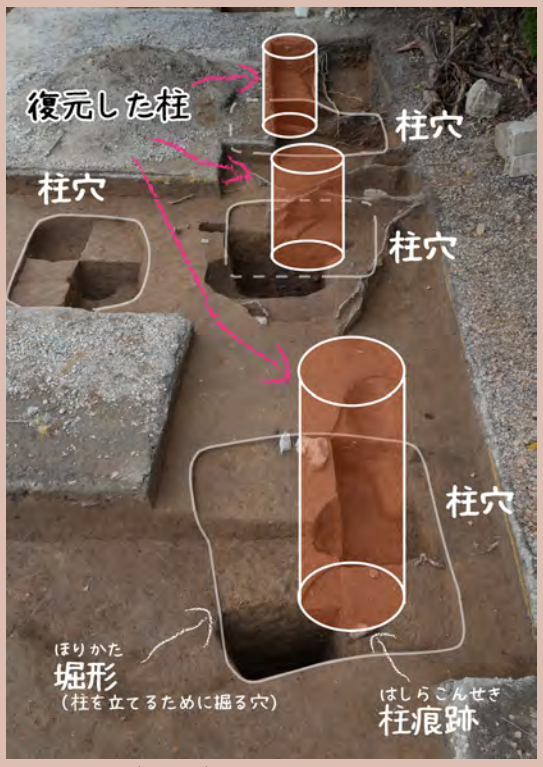
※1　二つの材を繋ぎ合わせるコの字型の釘。

※2　動物の骨や皮などから抽出した接着材。

Topic!

最近の文化財トピックです。本号で特集している乙訓寺では、平成 28 年度から古代の伽藍配置を探るための発掘調査を実施しています。昨年度の調査では「南門と回廊」にあたる建物の柱穴が見つかる大きな発見がありました。今年も調査を継続中。乞うご期待！

乙訓寺第 29 次調査（長岡京跡右京第 1252 次）



門跡の様子（北から）

現在の乙訓寺は、元禄期に再興されたものであり、創建時の主要施設は明らかになっていません。古代の乙訓寺に関係する遺構は、昭和 41 年の発掘調査（乙訓寺第 1 次）で「講堂」と推定される建物が見つかっていますが、後の調査で長岡京期の掘立柱建物であることがわかりました。今回、伽藍の南東で実施した発掘調査では、乙訓寺で最大規模の柱穴が新たに見つかりました。また、それとは別の柱列も東にひろがることが確認でき、「門」と「回廊」に伴うものと推定されます。この発見により、45 年ぶりに古代乙訓寺の構造を探る貴重な成果が得られたと言えます。

昭和 41 年に見つかった講堂跡（北から）

この成果を基に調査を進めれば、古代乙訓寺の伽藍配置や規模に迫ることができるかもしれません。

発掘調査成果

タイムトラベル写真を撮ろう！

お寺の Trivia トリビア

ぼさつ 菩薩

妙見菩薩（寂照院）

どこが違うの？

にょらい 如来

阿弥陀如来（乗願寺）

Q.
なんでも仏像って言うけど、「ぼさつ」と「にょらい」はどこが違うの？

A.
この二つは同じ“釈迦（しゃか）”（仏教の開祖）の姿を表しています。「菩薩」は釈迦の修行時代のようすを表したもので、結い上げた長い髪や宝飾品を身に着けています。「如来」は釈迦が悟りをひらいた姿を表したもので、布を体に巻いただけのシンプルな装いです。

来年1250歳になります

空海さん

お知らせ

今年 3 月、国史跡恵解山古墳の西造り出しを修繕しました。整備当初はコグマザサを植えていましたが、生育が悪く、一部が崩れてきていました。今回の整備は発掘調査で得られた古墳のイメージを損なわないように配慮し、固まる土で造り出しを再現しました。新しくなった西造り出し越しに見える恵解山古墳はどんな印象ですか？

before

after

表紙：乙訓寺本堂
中面写真・図面：乙訓寺・公益財団法人美術院　提供

『Moshi-mosuⅣ』vol.20

バックナンバーはこちら！

発行：長岡京市教育委員会文化財保存活用課　京都府長岡京市天神 4 丁目 1 番 1 号／令和 4 (2022) 年 6 月